

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年6月9日現在

機関番号：32504

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22530826

研究課題名（和文） 近世前期日本漢学教育に関する実証的研究  
—中国語との関係性を指標として—

研究課題名（英文） An Empirical Study of Chinese Learning Education in Early Modern Japan, Taking the Relationship with Chinese Language as Marker

研究代表者

朱 全安 (SHU ZENAN)

千葉商科大学・政策情報学部・教授

研究者番号：20266183

研究成果の概要（和文）：本研究は、近世前期日本の漢学教育機関の漢学教育を考察の対象として、その根底をなす中国文化摂取の実態に焦点を当て、中国語との関係性という視点から、近世前期日本の漢学教育を解明したものである。江戸前期、幕府諸藩の為政者が新たな統治原理を模索する段階において儒教に対して示した関心と、幕藩体制の中に儒教を組み込もうとする林家塾の歴代当主の思惑・努力とが相俟って、林家塾が幕府文教を掌る地位を獲得していく過程において、折々の必要に応じて中国語・中国文化の摂取が行われた実態を闡明した。

研究成果の概要（英文）：This research project elucidates education in Chinese learning during the early Edo period, through close investigation of this education in institutions of Chinese learning, with a focus on the underlying practical realities of the adoption of Chinese cultural forms, and from the viewpoint of its relations with living Chinese language. The research has clarified the practical realities of how Chinese language and cultural forms were adopted in response to particular needs from time to time, during a time when the heads of the Hayashi family school – whose efforts to integrate Confucianism into the governing systems of Bakufu and domains coincided with the interest in Confucianism on the part of statesmen in the Bakufu and domains casting about for new principles of government – were progressively winning a position of control over the Bakufu's cultural education.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2011年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2012年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学、教育学

キーワード：教育史、文化史

## 1. 研究開始当初の背景

本研究は、研究代表者が二十年にわたる日本教育史の研究を通して積み重ねてきた研究成果と、研究視角・研究方法の深化とに基づいて発展的に構想されたものである。

研究代表者は、近代教育草創期の日本官立学校での中国語教育の成立過程を考察して以来、一貫して教育学の視点から、日本における中国語の学習・教育の歴史を考究してきた。当該研究を通して、近代教育の中で中国語教育が成立するに至るには、それ以前の様々な歴史上の政治的・経済的・社会的要請が強く関係し、とりわけ近世日本における中国語教育の実態を知る必要があると強く感じた。

そこで、研究の範囲を、近世日本の中国語教育の実態の解明に広げ、長崎唐通事の中国語教育、江戸初期に来日した黄檗派の僧侶たちによる中国語の教授、来日中国文化人による中国語教授等について、政治的・社会的・文化的な状況を視野に入れつつ、総合的な観点から研究を進めてきた。

それにより明らかになったことは、①近世前期日本の漢学教育は決して具体的な政治的・社会的・文化的要請から切り離して正確に理解することはありえず、それゆえ、②文化史研究の視点を近世日本の教育史研究に加えなければならないこと、③近世前期に各種の漢学教育機関で行われていた漢学教育は本質的に外国文化摂取であり、各々の漢学教育機関の外国文化摂取の態様の差異は、漢学教育の中で中国語をどう取り扱うかに端的に現れているということである。

そこで、本研究の研究課題として「近世前期日本漢学教育に関する実証的研究—中国語との関係性を指標として—」を設定し、漢学教育における外国文化摂取の側面を解明しようとするに至ったのである。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、近世前期日本の漢学教育を政治・社会・文化との関わりの中で捉え、中国語との関係性を指標として、その根底にある外国文化摂取の側面を解明することにより、当時の漢学教育機関の漢学教育の本質を実証的に探究することである。

本研究は、林家塾をはじめとする主要な漢学教育機関を考察の対象として、それらの漢学教育の中での中国語の位置を手掛かりとしながら、漢学教育機関の漢学教育における中国文化摂取の姿勢を明らかにし、近世前期日本漢学教育の実態・理念・目標を究明するものである。

## 3. 研究の方法

本研究は、実証的方法を特徴とする。国内外の資料館・図書館等を訪問し、現地に残存する林家塾をはじめとする近世前期の主要な漢学教育機関の漢学教育に関する一次史料を調査収集して個々の基礎的な史実を掘り起こし、近世前期日本の漢学教育およびその中国語との関係性の実態を実証的に解明することを軸として進められた。

研究を進めるにあたり、第一に、近世前期日本の教育を、広く政治的・社会的・文化的な脈絡の中に織り込まれた出来事として明らかにすること、第二に、文化史研究の知見を取り入れ、従来の日本教育史研究のカテゴリーを超えて、その時代に行われた漢学に関する研究・教育を日本社会の共時的な事象として考察をすること、第三に、中国語との関係性を指標として近世前期の漢学研究・教育の根底にある外国文化摂取の側面を解明することに重点を置いた。

## 4. 研究成果

(1) 近世前期の漢学教育機関のうち、江戸幕府の教育態勢を方向づける上で重要な役割を果たした上野忍岡の林家塾（後に神田湯島に移転し湯島聖堂の学問所となり、更に後、昌平坂学問所となる）を取り上げ、幕府の教育態勢と林家塾との関わり、林家塾が幕府の管轄下に入る経緯を研究し、次のことを解明した。

江戸前期、戦国の後に幕府を開いた徳川家康より、二代秀忠を経て、三代家光までが強力に推し進めた武断政治は、比較的に安定期に入った四代家綱の治世において文治政治へと転換された。幕府諸藩の為政者は、新たな社会をいかに統治していくか、いわば統治原理を新たに構成しようとする試みとして儒教に強い関心を示した。従来、幕藩体制という武家による政治体制下において、武家ではない儒者林家の人々は御伽衆であり、政治的に重要な地位が与えられなかったと考えられてきた。しかしながら、林家塾の当主たちは、客観的に明瞭な形では重要な地位に就いていなかったものの、老中をはじめとする幕府重臣という政権の中核にいた権力者たちと日常的に往来して、文教政策に関して自らの意見を開陳し、幕府の教育方策を制定するに当たって多大な影響力を持っていたことが明らかになった。

(2) 林家塾が大いに発展した寛文年間（1661—1673）を取り上げ、第二代当主林鷺峰をはじめとする林家の人々が、朱舜水および彼が話す生きた漢語に対してとった姿勢について追究した。

また、林家の人々がとった対応と対照するため、林家周辺の漢学者や好学の大名が、朱舜水および生きた漢語に対して示した反応について探究した。具体的には、下川三省との関わりで、小城藩主鍋島直能の中国の言語・文化に対する姿勢について、五十川剛伯との関わりで、加賀藩主前田綱紀、加賀藩家老奥村庸礼、藩儒木下順庵の生きた漢語に対する姿勢について考察した。

これらの事例との比較により、生きた漢語の摂取、朱舜水との接触に関して林家が取った姿勢が決して積極的なものでなく、むしろ保守的なものであったことが明らかになった。

(3) 江戸幕府の儒者林羅山(1583-1657)が幕府の手厚い援助を受けて創設し、儒学研究をその存在の根幹としていた林家塾は、第二代当主林鷺峰(1618-1680)の時期、彼の努力により発展し、林家および林家塾の地位は高められた。それを示す重要な出来事が、寛文三年(1663)幕府より鷺峰に、唐代貞観期の「弘文館学士」に近似する称号「弘文院学士」が与えられ、それに因んで林家塾が「弘文院」と呼ばれるようになったことである。

将軍家綱から鷺峰に「弘文院学士」の称号が授与された理由については、先行研究では不明のままであったが、本研究によって明らかにされた。すなわち、父羅山が訓点をつけた『五経大全』の講義を二十三年間(寛永十八年(1641)-寛文三年(1663))たゆまず続け無事完了したからであった。称号授与理由の解明は、本研究の大きな成果の一つである。鷺峰は自分に与えられた「弘文院学士」を、唐太宗の政治顧問として文教政策の決定に影響を及ぼした唐代貞観期の「弘文館学士」に重ね合わせて認識していた。

中国の学問に通暁し、中国の歴史を熟知していた林家は、漢代以来、中国の歴代王朝を支えてきた儒教の理論体系が、徳川政権を支える理論体系として組み込まれることを強く希求すると同時に、林家自身が、唐代貞観期の「弘文館」のように、全国の文教を司る頂点の地位に立つという明確な達成目標をもっていた。

中国に倣った儒学者の称号「弘文院学士」が鷺峰に与えられたことは、政権中枢にいる幕閣たちに対する林家の積極的な働きかけと、中国の学問に通じた林家に対する幕閣たちの手厚い庇護という相互作用によるものであり、江戸前期の幕府文教における中国文化の摂取を示す一つの事象である。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

- ① 朱全安、江戸前期幕府文教における中国文化の摂取、国府台経済研究、査読有、23巻1号、2013、7-25
- ② 朱全安、弘文院学士号取得にみる林家の大望—幕府文教施策との関連性の視点から—、千葉商大紀要、査読有、50巻1号、2012、21-35
- ③ 朱全安、江戸前期における生きた漢語の摂取に対する林家の姿勢—寛文期を中心に—、千葉商大論叢、査読有、49巻1号、2011、83-96
- ④ 朱全安、江戸初期幕府の文教態勢における林家の役割—林家と大名・幕閣との交際を通して—、千葉商大紀要、査読有、48巻2号、2011、1-12

[学会発表] (計4件)

- ① Zenan Shu, Hayashi Gahō's title "Kōbun'in Scholar" and the Hayashi family's efforts in the Bakufu's educational enterprise, The Society for the Study of Pre-Modern East Asia, 23 February 2013, The Oriental Institute, the University of Oxford, the United Kingdom
- ② 朱全安、江戸初期林家塾学礼導入浅析、礼学国際学術研討会、2012年4月7日、清華大学(中国北京市)
- ③ 朱全安、寛文期忍岡家塾と作為武家社会教養—的漢文研究—、「東亜漢文学研究—回顧と展望」国際学術研討会、2011年10月29日、浙江工商大学(中国杭州市)
- ④ Chard Robert, Religious Manifestations of Confucianism: Zhu Shunshui 朱舜水 in Japan, 19 May 2010, the Chinese University of Hong Kong, Hong Kong

[図書] (計1件)

- ① 千葉商科大学政策情報学部10周年記念論集刊行会、日経事業出版センター、政策情報学の視座—新たなる「知と方法」を求めて—、2011、355-371

6. 研究組織

(1) 研究代表者

朱 全安 (SHU ZENAN)

千葉商科大学・政策情報学部・教授

研究者番号：20266183

(2) 研究分担者

Chard Robert (CHARD ROBERT)

東京大学・東洋文化研究所・客員教授

研究者番号：30571492